

ヒタルナリ、熱解ストキハ自ラ愈ル故、薬用ニ及バズ、人老テ耳ノ聾ルハ、鼓膜衰弱シ張ノ弛ミタルナリ、敗鼓フルタイノ弛ミテ聲音ノ應ゼザルト同ジ、又老眼ノ衰弱シテ鎖屑ノ物ノ見ヘスト同理ナルコトヲ知ルベシ、薬餌ノ治スル所ニ非ズ、聾ミ聾クニテ聾ルコトアリ、常ニ聾ミ聾クノ濕リテ出、或ハ脂ノ如クニ出ル者ハ、自然ト耳中一杯ニ塞リテ聾ルコトアリ、江戸室町島屋平七ト云フ者、耳ノ聾ルコト已ニ數年ナリ、來テ治ヲ請フ、先ヅ紫雲ヲ耳中へ滴入スルコト數日、後ニ水銃スイジュニテ温湯ヲ耳中へ射注スルニ、炒菽イナヲ拆ツタル様ナ物二片出テ、又脂ノ如キモノ多ク出デ、宿痾脱然トシテ去リ、特ニ聰ヲ覺フ、後此手段ニテ耳聾ヲ療治シテ、奇驗ヲ得タルコト尤多シ、此事已ニ病源候論ニ載ス、

〔傍廂 前篇〕聾

加藤千蔭翁の月次會日に、我彦齋藤彦若かりし時、季鷹縣主と安田躬弦と、三人にて行きけるに、何くれと物語まける中に、千蔭翁のいはく、近頃は本居宣長こそ金聾になりたれといはれしを、傍にて聞きて、躬弦がいはく、宣長を假名聾とのたまふ、千蔭先生は、眞名聾にやといひけれど、千蔭翁にはきこえず、人々は打ちたふれてわらひぬ、季鷹縣主にもきこえぬこそをかしかりしか、又或やんごとなき君の御まへにて、人々物がたりしける時に、守の殿のたまはく、近頃季鷹が狂歌に、

我耳の遠くなりしは年をへて聞えぬ歌をよみしむいか、とよみしは、いとおもしろしとのたまひければ、御まへに居たるくすし某の年老いたるが、さばかりの歌おのれもよみ侍るなり、さまでほめさせ給ふべきにあらずといへば、彼殿さらばよめとのたまふに、彼くすしがとりあへず、

我耳の遠くなりしは年をへてきかぬくすりをもりしむいか、いかいひければ、むらいのつみ